

十年間の活動報告(1996～2005年度)

開設第11年度から20年度までの活動報告は、以下の通りである。

1. 研究会の開催

この10年間に研究会をのべ47回開催、報告者はのべ59名（うち学外者7名）にのぼる。別頁に一覧を掲載した。第100回記念研究会・懇親会を2005（平成17）年10月27日に開催した。

2. 公開講座の開催

女性学公開講座を次の通り実施した。

- ・第7回 テーマ：女性と芸能—その1（1996年11月），狂言への招待（和泉淳子 和泉流狂言師，十世三宅藤九郎 和泉流狂言師）
- ・第8回 テーマ：女性と芸能—その2（1997年11月），能の女性表現（本田光洋 金春流シテ方）
- ・第9回 テーマ：女性と芸能—その3（1998年12月），文楽人形の女性表現（吉田勘緑 文楽人形遣い，吉田清之助 文楽人形遣い，桐竹紋若 文楽人形遣い）
- ・第10回 テーマ：女性と芸能—その4（1999年6月），歌舞伎の女性表現（中村東蔵 歌舞伎俳優）
- ・第11回 テーマ：女性文化とジェンダー（2000年11月），第1部 講演 女性科学研究者としての成長—体験を踏まえて—（島田淳子）／第2部 シンポジウム 女性・ジェンダーをテーマに博士（学術）号をとって—活躍する若手研究者（大竹美登利 東京学芸大学教授，松葉口玲子 鳴門教育大学助教授，堀内かおる 横浜国立大学助教授，斎藤悦子 岐阜経済大学専任講師）／第3部 研究発表 21世紀「女性文化」へ（伊藤セツ），マリアンネ・ヴェーバーと女性文化（掛川典子），日本大正期の「女性文化」（塩谷千恵子）・「女性文庫」について（柳秀子）
- ・第12回 テーマ：国連『世界の女性2000—実態と動向』の面白さ（2001年11月），講演（伊藤彰彦 日本統計協会理事長），コメンテーター（大野曜 国立女性教育会館理事長，森ます美），コーディネーター（伊藤セツ）
- ・第13回 テーマ：女性とキャリア形成—働き方のユニバーサルデザイン（2002年11月），第1部 講演 女性のサステナブルな働き方を求めて／マスコミで働いて10余年—ライフコースと重ねあわせて（木村葉子 毎日新聞社記者），男女雇用機会均等法15年は女性の働きと社会の意識をどう変えたか（青柳武 昭和女子

大学元図書館長）／第2部 講演 女性のキャリア形成のバリア・フリーにむけて／キャンパスセクシュアルハラスメントを考える—社会人となる前の人権侵害（田中かず子 国際基督教大学教授），大卒女性のキャリア—今日の意識と環境（森ます美），コーディネーター（伊藤セツ）

- ・第14回 女性とキャリア形成—働き方のユニバーサルデザイン その2（2003年11月），キャリアデザインとインターンシップ（首藤宣弘），—そして今思うこと：私の仕事と生活（杉浦久子），企業の中の女性—しなやかに道を拓く（山口一美 ㈱アサップ代表取締役・立教大学大学院講師），コーディネーター（伊藤セツ）
- ・第15回 世界の女性は今—グローバル サミット オブ ウィメン イン ソウル から（2004年7月）基調講演：韓国は変わった，日本は？（Yunsook LEE 元 Hannara 党16代国会議員），レポート（中平優子 マッキンゼー・アンド・カンパニー マネージャー），パネルディスカッション（齋藤正治 ㈱日産自動車人事部ジェネラルマネージャー・キャリア・コーチ，岡村洋子 エイゴタウン・ドット・コム㈱副社長，アン・佐渡・本城 NPO 法人 GEWEL 副代表），コーディネーター（坂東眞理子）
- ・第16回 日本の格差—教育差・職種差・男女差の実態（2005年6月）基調講演（橋本俊詔 京都大学大学院教授），パネリスト（橋本俊詔 同左，木下武男），コーディネーター（坂東眞理子）

注：所属不記入はすべて本学教職員

3. 読売・昭女大 女性アカデミア21の開催

昭和女子大学と読売新聞社との共同主催（女性文化研究所が窓口）により，本学女性教養講座として公開シンポジウムを開催した。

- ・第1回テーマ：「二十一世紀人生パワー戦略—仕事と家庭と自己実現」（2004年10月），パネリスト（玄田有史 東京大学社会科学研究所助教授，森ます美，坂東眞理子），コーディネーター（北村節子 読売新聞社調査研究本部主任研究員）
- ・第2回テーマ：「母と娘—葛藤・自立・継承」（2005年10月），基調講演「古典に見る母と娘」（馬場あき子 日本芸術院会員・歌人），パネリスト（関沢英彦 博報堂生活総合研究所顧問，松永しのぶ，坂東眞理子），コーディネーター（北村節子 読売新聞社調査研究本部主任研究員） 注：所属不記入はすべて本学教員

4. 女性文化研究所紀要の発行

当研究所紀要は、編集委員会（委員は主に大学院生活機構研究科専任教員）規程に基づき、全学公募、審査制度の導入、年1回（2002年度までは年2回）刊行を特徴としている。この10年間に『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第18号（1996）～第33号（2006）を発行した。

5. 研究叢書の発行

女性文化研究叢書を3集刊行した。書名は次の通りである。

『昭和女子大学女性文化研究叢書第三集 女性文化とジェンダー』（昭和女子大学女性文化研究所編、御茶の水書房、2002）

『昭和女子大学女性文化研究叢書第四集 ベーベルの女性論再考』（昭和女子大学女性文化研究所編、御茶の水書房、2004）

『昭和女子大学女性文化研究所設立二十周年記念 女性文化研究叢書第五集 輝く女性たち－光葉の三五名』（昭和女子大学女性文化研究所編、御茶の水書房、2006）

6. ニュースレターの発行

『昭和女子大学女性文化研究所ニュースレター』No. 25(1996.7)～No.47(2006.3)を発行した。

ニュースレターの内容は、公開講座・研究会・読書会や刊行物など研究所関連情報等を中心としている。

7. WORKING PAPER の発行

No.11 『アウグスト・ベーベル Die Frau und der Sozialismus にみるジェンダー統計表－各改訂版の変遷を追う』（伊藤セツ、1997.11）

No.12 『A.ベーベル『演説著作選集』Augewählte Reden und Schriften 全10巻14分冊の完結によせて－女性解放論を中心としての紹介』（伊藤セツ、1998.3）

No.13 『国連の3冊のジェンダー統計集にみる家族・世帯の扱いの変遷と The World's Women 2000, Trends and Statistics 第2章 家族の中の女性と男性の仮訳』（伊藤セツ、2000.12）

No.14 『鹿児島県の農村地域における男女共同参画推進のあり方に関する研究－始良地域における男女共同参画推進のためのマニュアル作成』（基山淳子、2002.11）

No.15 『マーガレット・フラーの女性解放論『十九世紀の女性』－真理という太陽に身をささげる娘たち』（上野和子、2003.3）

No.16 『男女共同参画社会実現のための社会政策システムの構築をめざして－20年後の予測調査から』（杉田あけみ、2003.8）

No.17 『昭和女子大学卒業生の社会的活動に関する調査（中間報告）』（光葉女性文化研究グループ、2004.3）

No.18 『昭和女子大学におけるインターンシップの立ち上げ－2002～2005 進路支援センターの経緯を中心に』（首藤宣弘、2005.10）

No.19 『日本経営教育学会におけるジェンダー課題』（杉田あけみ、2006.3）

No.20 『科研費対象研究「日独米における20世紀初頭の女性運動指導者に見る優生思想と育児観の比較研究」中間報告 ヘレーネ・シュテッカーの「産児調節と人間経済学」に見る優生思想』（掛川典子、2006.3）

No.21 『クララ・ツェトキーン新研究 第1報』（伊藤セツ、2006.3）

8. 研究生レポートの発行

No. 8 『中国農村における女性労働力の非農業労働力への転換についての予備的考察』（王薔、1996.9）

No. 9 『続：中国農村における女性労働力の非農業労働力への転換についての予備的考察』（王薔、1997.2）

No.10 『シャーロット・パーキンス・ギルマン「女性と社会サービス」翻訳と考察』（神尾久子、1997.2）

No.11 『中華民国以降における蓄妾の慣行と法制』（程郁、1999.9）

No.12 『西川文子の職業観－「新真婦人」を中心に』（鈴木朋子、2004.3）

9. 研究グループによる共同研究

この10年で研究グループおよびワーキンググループを組織し、活動した。

- a. 「ゲリッツェン女性史コレクション研究グループ」（平成3－17年）
- b. 「光葉女性文化研究グループ」（平成14－16年）
- c. 「光葉女性文化ワーキンググループ」（平成16－18年）

10. 研究生の受入れ

平成2年度に女性文化研究生規程を新たに設けてから、該当年度である平成8年度以降の受入実績は、平成11年度1名（留学者）、平成14年度1名、平成15年度2名（2年継続したものもいるので実質3名）である。研究生の進路は、大学教授1名、大学非常勤講師1名、大学院修士課程への進学1名である。

11. 特別研究員の委嘱

平成14年度に女性文化研究所規程を改訂し、必要に応じて特別研究員の委嘱を開始した。平成14年度1名、平成15年度1名、平成17年度2名、平成18年度3名（継続したものもいるので実質6名）である。

※創設(1986)～第10(1995)年度の活動報告は『女性文化研究所紀要』第18号を参照